

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

フィジー語 [Fijian] (ことばというパスポート 1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊澤, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5824

英語や日本語とは全然違う言語を勉強してみたいな。大学の図書館に行ったら、フィジー語の文法書があった。学生が頻繁に海外旅行にでかけだす以前のこと、私は例文にでてくる単語をみてはじめて、ああ南の島なんだ、と気づいたくらい。文字はアルファベットで、正書法は日本語のローマ字に似ているから、読み方に慣れるのはそんなに難しくない。でも、カセットテープなんてついてこないから、どんな風に聞こえる言語なんだか全然わからなかった。だから発音できないし、発音できないと文が覚えられない。語順はいわゆるVOSで動詞が最初で主語が最後、確かに英語や日本語とは「全然違」ってわくわくしたけれど、例文をながめているだけでは、「だれだれが」が文の最後にあったりして本当に意味が通じるのだから、どうにも心もとない。それに単語だって、「ココナツ」や「さんご礁」ならいいけれど、「パンダナスのマット」とか「ココナツの外皮からとった繊維で編んだひも」とか、実物が全然思い浮かばないし、「村の首長会議」といっても何を話し合う場所なんだかちんぷんかんぷん。長い文はいつまでたっても読めるようにはならなかった。

そんな、まるで化石のようだったフィジー語は、はじめの現地調査で本当のことばになった。覚えられなかったはずの単語が、実物を目にしたとたん口からすんなり出て

ことばというパスポート

1

……【新リレー連載】



くる。本が読めなかったのは、日本では想像もしないような生活背景があったためだとわかった。そしてもちろん、主語を文の最後にくつつけたってちゃんと話ができるのである。どんな外国語でも、自分の言いたいことが少しづつ表現できるようになるのは本当に楽しい。

でも何よりの励みは、ほんのカタコトでも大歓迎してくれる、フィジーの人達の反応だった。フィジー系住民とインド系住民が約半数ずついるフィジーの公用語は、ごく最近まで英語のみ。英語がつかえるから、観光客はもちろん、外国人は、まずフィジー語は覚ええない。カタコトのフィジー語を話す私はどこにいても珍しい存在で、バスに乗ってひとことなにか言おうとあつというまにとり囲まれて質問攻め、降りるまで退屈することはない。恥ずかしがりや



のフィジー系の人達が、フィジー語が話せるとわかったとたんにつつかり彼らのペース。「どうしてフィジー語を話せるの」「うちに一泊していきなよ。」何度も同じ質問に答えるうちに巻き舌のrも発音できるようになったし、挨拶の仕方でも返し方も覚えた。慣れてしまうと、英語とフィジー語を使い分けるようになった。おしゃべりしたいときにはフィジー語、そつとしておいてほしいときには英語、インド系商人とは英語だけれど、よそ者だと思ってごまかされそうになったら「うっかり」フィジー語でひとことふたこと。フィジー語は、現地の人達との関係を近くにも遠くにもあやつれる魔法の糸みたい。だから、フィジー本島の山奥にあるナンラウ村に調査に行くまでは、フィジー語のために困った状況におちいるなんて、思っても見なかった。

[Fijian]

フィジー語

きくさわりつこ
菊澤律子 ←

ターヴァからナンラウまで行くバスが運行休止になったかもしれない、というのは聞いていた。でも、聞く人によって返事が違うものだから、とにかくターヴァまで行ってみて、もしバスがなければ市場へ行つて野菜を売っているナンラウの人を見つめるつもりだった。村人たちが街との間を行き来している何らかの交通手段——馬か、Koruaと呼ばれるトラクター——があるはずだ。

さて、特急バスが無事ターヴァに到着し、街に一歩足を踏み出したとたんにインド系のタクシートの運転手たちに囲まれる。ナンラウまではタクシードで行くしかないよ。自分の車なら片道四五ドルにまけてやる。私はKoruaを探しているの、と言うのに、そばに止めてあるタクシードを指さして、これがKoruaだといって譲らない。幸いにしてすぐ近くにフィジー系の女性が二人、こちらを見ているのが目に入ったから、「ね、ナンラウ行きのバスがあるかどうか知っている？」とフィジー語で話しかけた。彼女達は驚く様子もなく、あるよ、と言い、商売熱心なインド系の運転手たちは散っていった。あたりで話を聞いていた人たちは憤慨している。四五ドルもとろうとするなんて。

ところが、切符売り場に行ってみると、案の定、ナンラウ行きのバスは欠便になって久しいとか。これは覚悟して

旅立つ前に

標準フィジー語は、フィジー諸島共和国の公用語のひとつで、話者人口は約35万人。ロトゥーマ語、ポリネシア諸語とともにオセアニア諸語のなかの中央太平洋語派を形成しています。sVOSという語順（sは主語の人称・数を表わす一致の標識）とともに、前鼻音・非前鼻音の対立があること、代名詞において単・双・少・複数と数の区別が発達していること、所有表現に、身体部位・親族名称、食べ物、飲み物、一般所有の区別があること、非対格動詞と非能格動詞の比率が半々であることなどがよく知られています。現地では、標準語の基盤となったンパウ方言をはじめ、地域・島ごとに様々な方言が話されています。

【学習情報】ここでは、独習する場合に使いやすい教材をご紹介します。

〈入門書〉菊澤律子 1999『標準フィジー語入門』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所（pdf版が次のサイトで入手可能です。<http://www.aa.tufs.ac.jp/elib/ltext/fji/pdf/>）

Milner, G. B., 1990, *Fijian Grammar*. Suva: Government Printer [reprint of Milner 1956].

〈辞書〉菊澤律子&アポロニア・タマタ 1999『標準フィジー語学習辞書』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所／Capell, A., 1991, *The Fijian dictionary*. Suva: Government Printer. [reprint of Capell 1941.]

〈会話表現集〉Geraghty, Paul, 1994, *Fijian phrasebook*. Victoria: Lonely Planet／庄司香久子・Albert J. Schutz『フィジ語会話集 英語対照／フィジ・ガイド付』泰流社。

〈その他〉コンピューターを使った練習問題や辞書を試作・開発中です。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ritsuko/1999/fiji/frame.html> をご覧ください。

【日常会話】

◆「おはよう」「こんにちは」

Yadra! 「おはよう!」、Bula! 「やあ!」
ヤンラ ムブラ

と言われたら、同じように Yadra! または Bula! と挨拶しましょう。早朝以外は Bula! を使います。

◆「はじめまして」「お久しぶり」

(Nī sā) bula vinaka.
ニー サー ムブラ ヴィナカ

誰かと初めて知り合ったり、久しぶりに出会ったときにつかう表現です。（ ）の中の語をつけるとより丁寧な表現になります。

◆お名前は？

O cei na yacamu? 「あなたの名前は
オ セイ ナ ヤカム
何?」

Na yacaku o Lili. 「私の名前はリリで
ナ ヤザング オ リリ
す。」

Lili をご自分の名前に置き換えて自己紹介してくださいね。

◆買い物

E yāvica beka na māqō?
エ ヤーヴィザ シベカ ナ マーゴ

「マンゴーひとついくらですか?」

E yādua na dola. 「一ドルです。」
エ ヤーンドゥア ナ ドラ

◆そして一日の終わりには

Moce! Mataka e! 「じゃあね。また明日。」
モゼ マタカ エ

Moce mada! 「さようなら。」

モゼ マンダ

家族に「おやすみ」というときも、Moce! と言います。

いた状況であるけれど、ぴったり付き添ってくれる二人の女性も計算外だった。「ターヴァはいい街だよ。ナンラウまでなんて行かなくなつて」「ターヴァの言葉を教えてあげるよ。」私一人なら、目の前の青空市場に飛びこんでナンラウの人を探すのに、と思っているうちにまわりには好奇心でいっぱい黒山のひとだかり、まったく身動きがとれない。「うちにとまりにおいでよ」「ナンラウよりうんと近いよ。」親切なフィジーの人達に囲まれて、私は途方に暮れてしまった。そうでなくても今回は調査期間が短い、とただ心の中であせるばかり。はやく、はやくどうにかしなければ、村の人たちが山に帰ってしまうではないか。

そこへ男の子が走ってきて英語で話しかけてきた。「ナンラウまで行く方法はないよ。野菜トラックに乗りでもない限りね。」インド系にもフィジー系にも見える彼を見て一瞬迷ったが、とっさに決心して怒鳴り返した。「その野菜トラックを探しているの。お願い、乗せてくれるか聞いてきて。」思いがけないフィジー語での返事に一瞬ぼけとした彼は、次の瞬間にはもう駆け出していた。もちろん、私が探すよりうんと早い。数分もしないうちにもどってきて、ちよつと離れた黄色いトラックを指さし、話をついたから、すぐ出発だよと、私の荷物を担ぎ上げた。そのあとは、野菜トラックに揺られて山道をどんどん終点

ことばというパスポート① フィジー語

まで登り、無事ナンラウ村に到着したのである。料金は五ドルだった。

その後、あれつと気づいたのは村にすっかり落ち着いてからのこと。そういえば。誰も私に野菜トラックに乗るのが平気かなんて、聞かなかった。ちゃんとした座席のないことを断りもしなかった。私が野菜トラックに乗りたくて叫んだら、当たり前のように乗せてくれて、そしてこれから行く山での生活のことを話してくれた。服装も荷物も顔つきも、見かけは明らかに外国人である私を初めて会った現地の人達が違和感なく受け入れてくれたとしたら、その理由は一つしかない。フィジー語がやつぱり、私のパスポートならぬ「乗車券」だったのだ。ナンラウまでの交通機関があるのかどうか人々の返事がいろいろだったのは、きつと、私が英語をつかったりフィジー語をつかったりしていたためだったのに違いない。

村での生活は少し寒かったけれど快適で、帰りは酋長がご自慢の専用車でターヴァまで送ってくれた。でも、ナンラウの言葉を覚えた私は、野菜トラックの帰りのチケットを無駄にしたような気がして、ちよつとびり損をしたような気持ちでこの名誉を受けたのである。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

言語学